

## 368

肺小細胞癌の進展・転移部位の検討  
虎の門病院呼吸器科・病理学科\*

○中谷龍王，野口昌幸，吉村邦彦，蝶名林直彦，  
中森祥隆，中田紘一郎，谷本普一，松下 央\*，  
原 満\*

肺小細胞癌は進行が早く，受診時すでに遠隔転移していることが多い。化学療法の発達により長期生存の報告例も増加しつつあるが大部分の症例は短期間のうちに全身転移により不幸な転帰をとる。今回われわれは肺小細胞癌の進展・転移部位につき剖検例を対象として検討したので報告する。

対象及び方法：当院に入院し，剖検のなされた男26例，女3例，計29例で平均年齢は63.0歳である。肺癌組織型は oat cell type 12例，intermediate cell tyte 9例，未分類8例である。Limited Disease (LD)は16例，Extensive Disease 13例である。治療としてS.56年以前はVCR，ENXを，最近4年間はADM，VCR，ENX，MTXを投与した。18例に放射線治療を併用した。

治療効果は，生存期間が最短0.8カ月から96カ月にわたり，50%生存期間はLD症例で12.0カ月，ED症例で6.2カ月であった。

これらの症例の剖検所見からその進展・転移部位について検討した。

成績：遠隔転移の部位で最も頻度の高いのは肝であり83%に転移がみられた。肝の重量は1000gから4150gに及び平均重量は2290gであった。中枢神経系では脳転移は52%に，脊髄転移は10%に，下垂体へは7%に転移がみられた。骨転移は79%と高率であった。肝以外の腹部臓器では副腎45%，膵41%，腎17%，脾14%に転移がみられた。他に甲状腺と前立腺にそれぞれ10%に転移がみられた。胸腔内では胸膜に76%，対側肺に45%，心嚢に24%，食道に10%転移を認めた。

リンパ節では表在リンパ節62%，縦隔リンパ節86%，隣周囲リンパ節41%，肝門部リンパ節28%，胃周囲リンパ節21%，後腹膜リンパ節34%に転移を認めた。

なお重複癌として1例に膵癌と Ependymoma を，微小結腸癌と肺高分化扁平上皮癌を各々1例に認めた。結腸癌を認めた症例は胃癌手術の既往があるが再発はみられなかった。

まとめ：剖検時進展・転移部位として肝，骨，脳，対側肺，副腎，膵への転移が目立つた。特に肝ではその腫大が著明であった。また腹部リンパ節にも高率に転移を認めた。

## 369

肺小細胞癌の遠隔転移についての検討

長崎大学第2内科

○神田哲郎，力竹輝比古，副島佳文，鶴川陽一，  
松本好幸，河野謙治，荒木 潤，岡三喜男，  
峯 豊，齊藤 厚，原 耕平

肺小細胞癌は化学療法および放射線療法により60-80%程度の奏効率が得られるようになった。しかし，生存期間は以前に比べ伸びたものの結局転移，再発で死亡する例が多い。今回，我々は肺小細胞癌の遠隔転移と予後について若干の検討を加えたので報告する。

【対象と方法】昭和53年より当科に入院した肺小細胞癌患者は59例(男性54，女性5)で年齢は12-80才，平均60.5才である。入院時のstageはI期4例，II期3例，III期18例，IV期34例である。入院時に頭部CT，骨シンチ，肝シンチを行ない，腹部CT，腹部エコーを随時加えた。stage別の生存期間の検討には転移の検索の不十分な3例と，癌死でない7例の計10例を除いて検討した。治療はEX，VCR，ADR，MTX，PCZ，VP-16，ACNUの3-4剤を組み合わせで行なわれ，Limited disease や脳転移には原則として放射線治療も行なった。

【結果】入院時の遠隔転移は骨シンチで49例中10例(20.4%)，肝シンチ56例中9例(16.1%)，及び頭部CT45例中1例(2.2%)にみられた。また，経過中に転移が明らかになったのは，それぞれ4例，8例，10例の順で脳転移が目立った。50%生存期間はstage I+II期で50週，III期で40週，IV期で27週であった。IV期の50%生存期間をさらに骨転移のみ，肝転移のみ，鎖骨上窩リンパ節のみ，多臓器転移に分けると32週，17週，39週，33週で肝転移を有するものの予後が悪かった。経過の明らかなCR例は13例で再発臓器は原発巣5例，脳3例，骨，鎖骨上窩リンパ節各1例，無3例であった。再発までの期間は6週から47週で平均23週であった。死因は全身がん転移33例，脳転移7例，肝転移3例と癌によるものが43例(72.9%)を占め，肺炎6例，不明4例であった。現在，生存者は6例のうち4例は3年以上の生存である。

【結論】肺小細胞癌の遠隔転移と予後について検討した。入院時検査では骨，肝転移が多かったが経過中には脳転移が増加してきた。また，予後は入院時に肝転移を認めたものが特に不良であった。CR導入例の再発は6-47週内に原発巣や脳にみられた。また，死因は多臓器転移によるものが多いが脳転移や肝転移によるものも多く，小細胞癌においては原発巣とともに肝，脳転移の早期発見とそのコントロールが長期生存に重要と思われた。